

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習を顧みて：英語科
Author(s)	神笠, 公伯
Citation	広大言語, 7 : 59 - 62
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046275">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046275</a>
Right	
Relation	



## 「教育実習を顧みて」 英語科

神 笠 公 伯

「広大言語」に「教育実習をかえりみて」と題して、何回か先輩諸氏が御執筆になり、私も実習の前に読ませていただき、大いに参考にさせてもらった。しかし、自分で実際に教壇に立って指導し、辛酸をなめるまでは、実感が伴なわないので印象も薄かった。今回は私なりの教育実習という貴重な、そして生涯を通じて2度とないであろう教生としての短期間の体験を通して、批評会で言われたことや自己反省、感想などをいくつか書きつらねてみようと思う。

＊

今年の教育実習は、中・高校が昨年よりも2ヶ月余り早く、夏休み前の6月22日に始まり、それから29日までが前半で、後半は夏休みも終る9月7日から14日までの2週間で、小学校の方は10月11日から18日までの一週間で割当てられた。今年中は・高校の実習が前半と後半で2ヶ月余りもブランクがあり、指導教官からのいろいろの批評や忠告を、後半の初めには夏休みボケも手伝って多少忘れたこともあり、何か効果が薄かったような気がする。

今年の英語科担当の教生は23名で、17:6で女性が圧倒的に多く、私のグループは教生3名で、内2名は英文科の女性であった。私の受持った授業は、中学校は3年生が一回限りで少し物足りなかったが、その代り高校の方は、高1リーダー1回、文法2回、高2文法1回、高3リーダー2回、文法1回で計7回で相当苦しかった。

さて、最初の受持時間の割当てで、初日のオ一時限目の高I文法(不定冠詞)を引受けた。引受けたというよりもむしろ、ただ単に男性だからという理由だけで、強引に押しつけられた感じ。勇ましく引受けたまでは良かったのだが、いざ家に帰ってTeaching planの作成に取りかかると、全然模範授業も見えておらず、何をどの程度まで教えたらよいのか見当がつかず、そうかと言って、最早、誰にも頼れないのだと思うと、少しく不安になったものである。しかし、明日の英語の授業を半ば期待し、新鮮な気持ちをもって登校する意欲的な生徒らの姿を心に思い浮べて気を取り直し、眠たい目をこすりながら、一生懸命Teaching planを作成し、いろいろの参考書etc.から適切と思われる例文をノートにまとめた。それからすぐに床にもぐりこんだが、時すでに午前2時、朝早いので定刻に起きれるのだろうかとか、その日の授業のことなどをアロコレと考えているうちに睡眠時間は刻一刻と縮まっていった。正味3時間も眠ったであろうか、

朝食もそこそこにして家を飛び出した次才。後から友達同志語り合ってみるのに、彼らとてやはり同じ心理状態で、睡眠不足だと本音を吐いたのに安堵の胸を撫でおろしたり、実際授業をし終って、その評価はさて置き、大きな失敗もなく何とか順調に授業が進んで、取越苦労した自分がおかしくなったりした。しかし、やはり軽率に考えないで真剣に下調べして行き、Teaching planを練ったので、まだあの程度までやれたのだと自慰的な気持ちにもなった。

ここで私たちのグループの批評会で取上げられたものをいくつかまとめて書いていこう。

まず指導案はかなり綿密に組立てておかないと、時間をもて余し、指導の方向を誤ったりする。内容はヴァラエティに富んだものを盛り込んで豊かなものにしておくことだ。

指導態度は何よりも冷静沈着であること。絶えず生徒の方を注視しないと、生徒は教師の一挙一動に対して相当敏感に反応するので、その反応を一早くキャッチするためでもあり、生徒に緊張感と共に親密感、信頼感をも与えることになると思う。

言葉使いは、私の場合初回で丁寧すぎると忠告された。あまり丁寧すぎても乱暴すぎてもいけない。適度に威厳があり、しかも親しみのもてる言葉使いが好感がもてる。日本語の場合は、文末が特に重要なので語尾をハッキリさせることが大切。英語の場合は、発音は早く明確で、しかもその上リズムが要求される。Model readingは相当練習していった積りだったが、教壇に立つとやはり上手にいかない。途中でトチったりするとあがるものになるので十分気を付けねばならない。

私の場合、あまり実験的な教授法は試みなかった。だから、どうしても教科書の説明中心で講義調となり、単調で退屈な授業となったと思う。一時間の授業で生徒と教師の話す時間の比率は7:3位が最適らしいが、慣れるまではなかなかそうはいかない。だから、生徒にどんどん発問して答えさせるのがよい。生徒のための授業だから、生徒中心——生徒に考えさせ、活動させる授業としたいのが理想。そこで発問の際に注意しなければならないことは、発問は全員に対して行い、少しの間を置き、考える余裕を与えてからテキパキと指名しなければならない。その発問の答えは、指名された生徒と教師の間だけで解決できればよいのではないから、クラス全体に徹底するように正答を教師が反復してやるのが大切なのである。ところで、Teaching planが立派に企画され、予想外の質問もなければ順調にいくのだが、質問の返答が長びくような場合は、特にクラスの大半がわかっていないものとか、その時間の内容と重要な関係があるもの以外はなるべく後回しにしないと、予定は狂ってしまう。それだけの融通はもちたいのだが、何しろ経験が浅いため、十分納得させるのに手間取り、そのために大切なことも言い落しがちになる。時間配当には十分気を付けていないと、50分という時間は指導者の立場からして、大変に短く

アッという間に過ぎてしまうものだ。

説明は能力差がかなりあるので中程度の生徒を対象にする。私の受持った高Ⅲのクラスは東大へ5名以上も進学すると聞いて、大変やりにくかった。特に大切と思われるもの、間違いやすいと思われるものをcheckして、重点的に押えていくことが大切。また例文はいろいろの辞書、参考書etc.から文法的にも内容的にも価値高きものを選択して用意しておく、教科書の説明にも役立つし、生徒の質問にも具体例を提示して説明するので納得させることができるものだ。

次に、いくらOralで授業を進めると言っても、黒板は有効に活用したい。大体1時間で全面を1回使用すればちょうど良いように出来ているそうだが、予め計画しておかないとなかなかうまく書けない。授業の最後まで残るものだけに、その時間に学んだことが一目見てわかるように配慮しないとイケない。私は最後まで満足のいく出来はなかった。

最後に、これは私の体験から言えることだが、授業に臨む場合、大いに自信をもっていなければ、その授業は半分は失敗したものになると思う。びくびくして恐れていたのでは生徒の方にリードされてしまって思うように指導できず、困却することになる。私が初回の批評会の時に、「自信がなかった」と言ったら、「自信のないことを謙虚に認めているのは良い。」と指導教官から言われて、ほめられているのかけなされているのかわからず変な気持ちになったものである。

以上述べてきたことは、殆んど私の授業に対して批評されたものです。いくら自分では成功したと思っても、長年の経験を積んでこられた指導教官からすれば、私たちは生徒であって、指導教官の批評の一言一言が強く骨身にしみてこたえたのは、誰しも同じではなかったかと思う。

次に補足的になるが、小学校の場合、6年生に配属され、1グループが8名で国語と算教を一時間ずつ受持った。小学校では、クラスが定まっているため、中・高校のように教師と生徒の間に溝のようなものもなく、大変家庭的で楽しい雰囲気だった。最初のうちは、幾分か控え目で静かだが、一度授業を終えると、児童の方も親しみを感じ、くすぐったり、肩にさばったり、いたずらしたりして、どうやって彼らを取扱ったらよいものかと一瞬戸惑いを感じた。国語で湯川秀樹博士の論説文を教え、抽象語、科学用語の説明が難しかった。説明すればする程難しくなっていくので、いい加減誤魔化したりして切抜けたが、児童の方は批評眼が鋭く、「先生は科学に弱いね」とか、「筆順を誤るようでは小学校からやり直した」とか赤裸々で痛烈な批評が、指導教官の批評よりも骨身にこたえ、有難かった。中・高校を教える時は、早く実習が済めばよいのにと思ったりしたが、小学校の場合は、一日一日が楽しく、教師の使命感とか、教師という職業の難しさ、楽しさを存分に味わうことが出来、最後のお別れ会の時など、しみりとした気持ちになり、自分は小学校の先生位が向いているのではないかと思っている。今でも児童一人一人の顔がまぶ

たに浮び強く印象に残っているのはどうしてなのだろうか。

実習に限らず、実際の教師となった場合でも、児童生徒と接触する一時間一時間は決してやり直しのきかないもので、双方にとって、貴重な一時間であり、先生の方では一時間で済むかもしれないが、クラス全体から言えば、一人一時間として、大変な時間がかかっているのであることを思う時、授業を展開する際は、細部にわたって慎重でかつ、周到な準備と綿密な計画が重要だとつくづく感じた。いくら計画が立派すぎても立派すぎることはないのである。

## 「教育実習の思い出」 国語科

三 村 佳 代 子

○ 付属高校にて

「出席簿、ありませんか」（私）「教卓に座席表が書いてあります」（生徒）「座席表？……ああ、ほんと。（このクラス、親切だなあ）」（私）その時間は、気持ちよく始まった。……「じゃあ、山下さん、読んで下さい。」「山下なんていませんよ。下山じゃないですか。下山読めよ。」「おかしいなあ、この座席表、右書きなのかしら」「はい、ありがとう。その次を谷田さん。」「谷田って男ですよ。」「そう？じゃ、谷田クン」「座席表の谷田は赤色で書いてあるのに……」「次を、橋本さん、え？そんな人いないんですか。おかしいですね。（この表、誰が作ったんだろ……生徒の名をうる覚えの教生かしら。困るわあ……）」

こうして「変ですね。おかしいですね。」を繰り返しながら一時間が終わった。授業のあとで、ある女生徒が教えてくれた。「すみません。あの座席表、友達がいたずらしたんです。気づきませんでした？……でも、あれくらい、よくなったうちですよ。以前はもっとひどかったんですから……」

—— 高校二年「現代国語」の時間に ——

○ 付属小学校にて

算数の授業中、計算をまちがえてみんなから見つめられた女の子が泣き出した。最初はそれでも黒板をまっすぐに見ながら、それからついには肩をふるわせて。すぐ後ろに席をとっていた私は、その子の心の内を思うと、たまらなかった。誰でもそんな思いをしたことがあるのではなからうか。……次の時間、その子は元気に隣の男の子に話しかけている。まだ目がはれていた。

理科は“脂肪”についての実験。牛脂を熱しながら、「すき焼きのにおい！」と叫ぶ声。植物